

〈創刊号記念論文〉

## スピリチュアルケアと歌物語

鎌田東二<sup>1</sup>

## 要旨

「体は嘘をつかないが、心は嘘をつく。しかし、魂は嘘をつけない」。スピリチュアルケアとは、「嘘をつけない自分や他者と向き合い、対話的な関係を結び開いていく試みと過程」である。その嘘をつけない自分の魂の発露と表現としての歌あるいは歌物語を、ジョン・レノンのソロアルバム『ジョンの魂』（1970年リリース）、『古事記』（712年編纂）、『平家物語』（13世紀初頭に成立）の三つの「歌物語」を分析する。そして、『ジョンの魂』においては痛みと愛の生存哲学が、『古事記』においては「むすひ」と「修理固成」の生存哲学が、『平家物語』においては「諸行無常」と「夢」の生死哲学が表出されていることを明らかにする。とりわけ、当時の一大戦争を民族の叙事詩として詠った『平家物語』最終巻「灌頂巻」のもつスピリチュアルケア的な意味と力とはたらきについて考察する。

キーワード：歌、物語、平家物語、スピリチュアルケア、身心変容技法

## 1. 「スピリチュアルペイン」とジョン・レノンの「神」～「神は痛みを測るための概念」

近年、スピリチュアルケア（spiritual care）について、さまざまな定義の試みがなされている。わたし自身はスピリチュアルケアを、「嘘をつけない自分や他者と向き合い、対話的な関係を結び開いていく試みと過程」と捉えている<sup>1)</sup>。「スピリチュアリティ」とは、何よりも、嘘のつけない、ごまかしのきかない、心の深みや魂の領域とはたらきだと考えるからである。

別の言い方をすれば、「体は嘘をつかないが、心は嘘をつく。しかし、魂は嘘をつけない」ということになる。体は体の生理学的メカニズムをもっている。もちろん、その体には微妙な作用を及ぼす。「病は気から」というように、心のもち方・はたらかせ方で体の調子も変化する。さまざまな形の喪失やダメージが体の不調

となって表れることはしばしば経験することであるし、また笑いが免疫力を高める効果があるように心のはたらきが体の具合を変容させることはよく知られている。その意味では、「身心一如」とまではいかずとも、身心のデリケートな相互相関関係は経験的に確かめられ、実感できるものである。確かに「体は嘘をつかない」というのは、かなり忠実に心の状態を反映するということでもある。

したがって、問題の核心は、その心が、体と魂の両方をブリッジさせるのりしろのような役目とはたらきをしている点だ。心は実に絶妙のはたらきをする。心は、あるものを薬にも毒にもできる「魔法の杖」のようなはたらき方をする。嘘をつかない体と嘘をつけない魂の両方に寄り添い、両者の声を聴きながらも、それに背くことも、無視することも、繋げることもできる。ある意味で、人間の自由の拠りどころはこの心のはたらき（無自覚的・無意識的心）やはたらかせ方（自覚的・意識的心）にあるといっ

てよいだろう。心は我慢をしたり、見栄を張ったり、自分を大きくみせたり、過剰に自己卑下をしたりす

<sup>1</sup> 上智大学グリーンケア研究所

連絡先：〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学グリーンケア研究所 鎌田東二

E-mail: t-kamata-ue7@sophia.ac.jp

る。その時々で変幻自在な動きをみせる。まるで鶴のように両義的で、曖昧で、狡猾で、脆くもあり強靱でもある。あたかも得体の知れない底なし沼のような。

しかし、どのように心(自分)を騙し、心(自分)が騙そうとも、自分自身のどこかに「それは変だ、おかしい、だめだ」と気づいている自分がある。「自分」という言葉が端的に示しているように、「自己」は複層的に自己分離することも可能である。だからこそ、「自分」が「自分」を騙すこともできるのだ。そして、このような「自分」と、あのような「自分」とを立て分けて二重人格的にも多重人格的にも生きることさえできる。複層的で多重的な「自分」であることができる。「二枚舌」を使うこともできれば、「三枚舌」を使うこともできる。それが心の複雑性であり、怪奇性であり、微妙さである。

しかし、その複雑怪奇な「自分の心」を、その底の方からか、また上の方からか、ありのままにみつめている自己がいる。その自己をソクラテスは「良心」というかもしれない。その「良心」ともいえる「嘘をつけない自己」を「スピリチュアリティ」とわたしは捉え、それが自己の「生のコンパス(羅針盤)」としてその人を根源的に動かし、はたらかせていると考える。

このことを、ビートルズのリーダーであったジョン・レノンの事例を元に考えてみる<sup>2)</sup>。

ジョン・レノン(1940-1980)は、第二次世界大戦のさ中、1940年10月9日にアルフ・レノンとジュリアン・レノンの長男としてイギリスの港町リヴァプールに生まれた。父はアイルランド系イギリス人で船乗りであるが、ジョンが生まれた時には航海中だった。ジョンは両親とはほとんど一緒に過ごしたことはない。自由奔放なところのある母ジュリアンはジョンを育てることができず、しかたなく姉のミミに預けた。こうして、ジョン・レノンは伯母に育てられることになった。

そのジョンに5歳の時、親のどちらかを選ぶなければならないという、人生の一大事が起

こった。唐突に、家族でニュージーランドに移住することを考えた父アルフが現われ、ジョンに父を選ぶか母を選ぶかを迫ったからである。この時ジョンは父親を選んだ。だが、しょんぼりと母ジュリアンが去っていくと、ジョンは堪え切れず泣きながら母の後を追いかけていった。その後父アルフは、ジョンがビートルズの一員になるまで姿を現さなかったという。

この時、5歳のジョンは頭脳を高速回転させていろいろなこと目まぐるしく考えたに違いない。母は自分と一緒に住んで自分を育てることができない。ならばこの際父と一緒に、ニュージーランドというどこか知らない、この世の果てのような異郷に行ってみようかなどと。もちろん、子供のジョンがそのように考えたかどうかは今となっては確かめるすべはない。しかしこの時、最初にジョンが父親を選択したことは事実であった。にもかかわらず母が出て行った時、ジョンは自分の決断を覆した。引き裂かれた子供の心。ジョンの心は実際は激しく父と母との間を揺れ動いていたのだった。だが行為というものは常に一つの出来事しか選択することができない。現実は一回限りだから、やり直しのきかないものだから。

この事態と生育歴を大げさにいえば、ジョンは二度親に見捨てられたといえるかもしれない。一度は生まれついてまもなく、二度目は5歳の時に、これはその後ジョン・レノンのもっとも深い心の傷となり痛みとなって、ジョンの生涯を衝き動かす動力となった。そしてそれはおそらく彼の生涯にわたり、負の感情にも正の感情にも種々に変容するものであったのではないか。ある意味では彼の「嘘」の根源であったのではないか。

ビートルズとして成功し、お金も名声も人気も得た。だがそんなこの世的な成功によっては彼の深い喪失感と空白と心の傷と痛みを癒すことはできなかった。それらはどこか「嘘」くさかった。そこでジョンはビートルズの成功に酔い痴れることなく、道を模索し続ける。ある時はインドのグルに瞑想を学び、ある時は心理学

に助けを求めた。そしてその過程でジョンは小野洋子と出逢い、自分の深い「スピリチュアルペイン」を理解する者を見いだしたとを感じる。ジョンは結婚して一児をもうけていたシンシアと離婚し、周囲の大反対を押切って小野洋子と結婚し、「ベッドイン」など奇抜なピースパフォーマンスで世間を騒がした。そして1970年という激動の年に、ビートルズを解散して最初のソロアルバム『ジョン・レノン (John Lennon)』(邦題は『ジョンの魂』)を発表する。

その冒頭は、「マザー」という激しい呼びかけから始まる。母さん、僕はあなたの子供だったが、しかし母さんは僕の母さんではなかった。僕は母さんがほしかった。けれど、母さんは僕をほしくはなかったんだ。(結局僕は、母さんに捨てられたのだ。だから、今度は僕が母さんを捨てる番だよ。) 母さん、さよなら。父さん、父さんは僕を捨てたけど、僕は父さんを捨てられなかった。僕は父さんを必要としたけど、父さんには僕が必要じゃなかったんだ。(結局僕は父さんにも捨てられたのだ。だから今度は、僕が父さんを捨てる番だよ。) 父さん、さよなら。ジョンはこのように歌う。

にもかかわらず、ジョン・レノンはこの曲の最後で、「母さん、行かないで。父さん、帰ってきて (Mama, don't go. Daddy, come home)」と大声で10回以上も繰り返すのである。その激しい叫びは、まるで『古事記』の中のスサノヲノミコトが母を恋い慕って「啼きいさちる」さまを目の当たりにしているようで、肺腑を抉る。切なく、悲しく、疼き、張り裂けるように迫ってくる。なぜこのような「自伝」的な歌をジョン・レノンはビートルズを解散してすぐに出したソロアルバムの冒頭で発表したのか。

このアルバム『ジョンの魂』は、①「母 (Mother)」, ②「しっかりジョン (Hold on)」, ③「悟り (I Found Out)」, ④「労働者階級の英雄 (Working Class Hero)」, ⑤「孤独 (Isolation)」, ⑥「思い出すんだ (Remember)」, ⑦「愛 (Love)」, ⑧「いいよ (Well Well Well)」, ⑨「僕を見て (Look at Me)」, ⑩「神 (God)」, ⑪「母

の死 (My Mummy's Dead)」の全11曲で構成されている。父と母に捨てられ、帰ってきてと叫ぶ「マザー (母)」の歌から始まり、自分を励まし、探究し、小野洋子と出逢って愛を見いだした喜びを歌い、そして最後に、「神」と「母の死」を歌って「ジョン・レノン」と題した世界を閉じる。

わずか50秒の大変短いラストソング「母の死」の前に置かれた4分9秒の曲「神 (God)」は、「神とはわたしたちの痛みを測る概念だ (God is a Concept by which we measure our pain)」というフレーズで始まり、それを再度繰り返し歌っている。そして自分は、魔法 (Magic) も易经も聖書もタロットもヒトラーもイエス・キリストもジョン・F・ケネディもブッダもマントラ (真言) もヴァガバッド・ギータもヨーガも王もエルヴィス・プレスリーもボブ・ディランもビートルズも信じないと、激しい否定の言葉を連ね、その先に、「僕はヨーコ (小野洋子) と自分を信じる」, 「愛する友よ、頑張っていこうよ、夢は終わったんだよ」と歌い閉じる。

これが探究の果てにジョンが見いだした「神」の「概念 (Concept)」であり、意味だった。「神とは痛みを測るための概念」であり、装置だ。その「痛み」とはいうまでもなくジョン・レノンの生育歴の中で積もりに積もった「スピリチュアルペイン (生きることの痛み)」であった。それはまるで、ジョン・レノンの「マントラ (真言)」のようであった。ここには「嘘」はない。「ジョンの魂」の真実が表現されている。

ジョンはソロアルバム『ジョンの魂』をレコーディングする前に小野洋子と共に「プライマル療法 (Primal Therapy)」の創始者のアーサー・ヤノフ (Arthur Janov, 1924-) による心理療法を受けていた。ヤノフは人間の心の奥底に幼少期からの「原初的痛み (Primal Pain)」があるとして、それを表現して開放する心理療法で評判になっていた。

療法を受けたジョンは、自分の心の奥底に封

印されていた幼少期の記憶と経験をまざまざと思い出し、18歳の時に突然交通事故で母を喪うという体験（ラストの「母の死」で短く歌われている）も含めて、自分にとってのもっとも根源的な「原初的な痛み」を歌として開放し、表現した。それがこのアルバム『ジョンの魂』である。「嘘」のない、赤裸々な自分自身の素の姿である。このアルバム全曲の総括ともいえる「神」の冒頭の「神は痛みを測るための概念（God is a concept by which we measure our pain）」というフレーズは、ヤノフとの心理療法中の対話の中で見いだされたものだったという。

「スピリチュアルペイン」や「スピリチュアルケア」について考える時、いつもこのジョン・レノンの歌「神（God）」が思い浮かぶ。ジョン・レノンにとって、「神」とは、「痛み」を感じ、みつめ、浄化するまなざしとはたらきであったということだ。確かに、彼はキリスト教の神やブッダを信じないとも言っているが、しかしある種の超越性、「痛み」を感受し受け止め超えるもう一つの「眼」を明確に示している。それは、ブッダやイエスが教えた道とそれほど遠くはないように思える。

## 2. 『古事記』に表現された「スピリチュアルペイン」と危機突破の生存戦略

前節で、ジョン・レノンの「スピリチュアルペイン」をスサノヲノミコトの母を思慕する思いと啼きいさちる業と結びつけた。そこで次に、『古事記』に表現された「原初的な痛み」や「スピリチュアルペイン」を和歌（短歌）表現との関係において検討してみることにしたい。

すでに拙著『古事記ワンダーランド』（角川選書、2012年）などで指摘していることであるが、『古事記』はわが国最初のグリーフケア・スピリチュアルケアの物語であるといえるだろう<sup>3)</sup>。それはまず何よりも生みの親イザナミノ

ミコトの死と遺族（夫イザナギノミコトと子共スサノヲノミコト）の慟哭と再生への希求として表現されているが、なかでもイザナミノミコトの死と喪失をもっとも深く「嘘のつけない」霊性的（魂的）次元で受け止めたのがスサノヲノミコトであった<sup>4)</sup>。

『古事記』において、痛みと悲嘆は日本列島という国土の産みの母であるイザナミノミコトの「死」によって引き起こされる。産みの親でありいのちの元である原母の死が夫神イザナギノミコトと子神スサノヲノミコトの悲嘆と痛みと荒ぶりをもたらし、さまざまな悲劇的な事態を引き起こす原因となっている。とはいえその死は、火の神カグツチの出産と引き換えにもたらされたもので、火の発生という大変重要な出来事の反面でもあった。

イザナミの死によるイザナギの悲嘆は、イザナギ・イザナミ夫婦神の「みとのまぐはひ」（性交）により最後に生まれた火の神カグツチの殺害となって現われる。イザナギは嘆きつつ生まれたばかりのわが子を十拳剣で切り刻む。だが、神々は死んでもさまざまな神々に分魂し変容することで生き続ける<sup>5)</sup>。

「嘘のつけない魂」という霊性の次元で、この原母イザナミの死の直撃を受けたのが、イザナギノミコトの禊の最後に鼻を濯いだところに化生したスサノヲノミコトであった。スサノヲは天照大御神と月読命の弟に当たり、神々の化生の最後に誕生することになる神であるが、スサノヲはイザナギの鼻から化生し、イザナミの胎から生まれたわけではないにもかかわらず、生まれた時から母（妣）を恋慕って泣き叫ぶという、『古事記』の物語的矛盾と結節をもっともダイナミックかつ象徴的に表現することになるキーマンの神である。

生まれつきの「啼きいさちる」神であるスサノヲは、その荒ぶりにより青々とした森林を枯らし、海の水をすべて干上がらせ、自然破壊も甚だしい破壊を招いたので、父イザナギから追放されてしまう。父から追放されたスサノヲは姉天照大御神に別れを告げに高天原に上る



が、そこでもまた破壊と混乱を招き、姉からも高天原を追放されてしまう。世界を二度危機に陥らせ、その危機打開のあおりで二度追放される痛みと悲嘆を担ったのがスサノヲノミコトであるが、そのスサノヲを「二度捨てられた」ジョン・レノンと重ねてしまう。

『古事記』の中のスサノヲは、「負の感情」の惑乱と制御の中心にいて、激しく振幅する。汚濁・暴力と浄化の両極を体現し、その転換を一挙に実現する神となる。スサノヲにおいて嘆きと哀しみ、思慕と愛が歌の発生を伴う浄めをもたらすのである。その意味で、スサノヲ神話は、仏教的な述語を借りるならば、根本的に「抜苦与楽」をもたらす芸能の発生に関与している。

事の発端は、母イザナミの嘆きと悲しみであった。黄泉の国へみまかりかみさり（神避）、自分の姿を探さないと、夫イザナギに堅く念押ししていたにもかかわらず、腐乱して蛆のたかった「いなしこめしはちこめき」醜い姿を見られたイザナミは、「吾に辱見せつ」という、恨みと哀しみと怒りのないまぜになった負の感情を爆発させ、出産・多産の女神が日に千人を殺すと呪う多殺の殺戮神に変貌する。この「辱」を受けたイザナミの恨みと哀しみと怒りの負の感情が世界破壊と世界創造の両極を孕むエネルギーの源泉となり、それが出雲神話形成の原動力ともなっていく。そのイザナミの哀しみを真正面から受け止めたのがスサノヲであった。

スサノヲはあごひげが胸先に垂れるようになって「母恋し」と大泣きし、その暴風のような啼き声により海の水が全部干上がり、山の木も枯れてしまうというありさまで、「悪しき神の音は、さこゑ蠅ばえな如ごとす皆満ち、万の物の妖わがはひことごと悉おこに発りき」という混乱と災いに見舞われた。そこで父神イザナギはスサノヲを問い質した末に追放したのである。世界にこれ以上の破壊をもたらさないように。

このように、スサノヲはその前半部ではイザナミの哀しみを引き継ぎ倍加させる手のつけられない狂暴な荒ぶる神として登場し、結果、父に追放され、姉の天照大御神に別れを告げに高

天原に上り、そこで「邪心・異心」がないことを証するために「物実ものざね」を交換して「宇気比うけひ」を行ない、タキリビメ・イチキシマヒメ・タキツヒメ（宗像三女神）を得て、心が「清明」であることを示しはする。だが清明心が証明されたということにはなっても、父に追放され、姉にその「邪心・異心」を疑われたためか、スサノヲの乱暴は収まらない。おのれの清明心が証されたと勝ち誇り、農耕の邪魔をしたり、神聖な大嘗殿を糞で穢したり、血だらけの馬を投げ入れて機織女を死に追いやってしまうなど、さまざまな破壊的乱暴狼藉を行なったために、天照大御神は怒り悲しみ、終に天岩屋戸に差し籠った。すると世界は暗闇となり、もろもろの災いが発生してきたので神々が集まって相談して、その破局を打破するために祭りを行なった。

これが『古事記』冒頭で出てくる「産巢日むすひ」と「修理固成おさめつくりかためなす」はたらきの生存戦略ないし生存力の第一であり、同時に、祭祀と神楽の発生を告げる神話となる。この「天岩屋戸あまのいわやと」と呼ばれる洞窟の前で神事を行なうことで天照大御神を洞窟から引き出すことに成功し、この世界に秩序といのちが復活し、最悪の破局を脱したのだが、世界を暗黒に導き混乱と危機に陥れた罪科を問われたスサノヲには厳罰が下された。鬚を切られ、手足の爪を抜かれて高天原から追放かむやら（神遂ひ）されたのである。

スサノヲは父と姉から二度にわたり、追放されたどうしようもない荒くれ者である。青年期のジョン・レノンのように、この前半部のスサノヲは周囲への配慮も何もなく見境なく暴れて破壊する手のつけられない荒魂あらみたまである。

不在の母を恋い慕って泣き叫び、父に追放される悲しみと矛盾を背負った破壊神の荒ぶる「荒魂」とその声の力。その負の声の破壊力がなければ、後半部において、『古事記』の第二の生存戦略とも生存力となる、浄めと和めをもたらす「歌」は出てこない。こうして、スサノヲの歌は『古事記』の生命哲学である「むすひ」と「修理固成」の具体的な発露であり、全体で

112もある歌謡の濫觴となるのである。

後半部、高天原から追放されて出雲に降り立ったスサノヲは、見違えるような救済神に大転換する。これまで泣き叫んで周囲の嫌がることばかりをする荒くれ者とは思えないほど、凛々しく迅速に、また的確な判断と行動で八頭八尾の怪物八俣大蛇を退治する英雄神に変化する。スサノヲは、そこでは、実に要領よくテキパキと八つの甕を置き、なみなみと酒を注ぎ、八俣大蛇に食い殺される運命にあった櫛名田比売くしなだひめを絶体絶命の窮地から救ってヒメと結婚する。その解放と愛の宮殿を作るために出雲の須賀の地に至って生まれて初めて「我が御心すがすがし」と歌を詠う。

八雲立つ 出雲 八重垣 妻籠みに  
八重垣作る その八重垣を

これは愛の讃歌であるが、その意味は実に単純である。「ボク、キミと楽しく幸せに住むための愛の御殿を作るよ、ボク、ハッピー！」という意味だけである。これがわが国の記念すべき和歌（短歌）の始まりである。短い韻律の中で三度も「八重垣」を連呼するそのヤエガキ・シュプレヒコール、「ヤクモ」と「ヤヘガキ」の「ヤ」の語の多用により、「ヤア、ヤア、ヤア」というような力強い喜びと慶祝の念をリズムに表現することに成功している。母を恋慕って泣き叫んでいた荒ぶる声が喜びの力強い声となって変容し解放されて進む。破壊的な声の力が調和に満ちた愛の言霊に変容する。その魔術的な変化。こうして、最大の穢れと負の感情の中にいたスサノヲが、荒ぶりの発動の果てに、八俣大蛇退治という浄化を経験して世界統合と調和の「むすび」を完成させた。手のつけられない不良息子が最悪最凶の八俣大蛇を退治することにより、力と心を制御するワザを身に付け、霊の真柱を打ち立てた。拙著『古事記ワンダーランド』や『世直しの思想』で主張したように、こうしてスサノヲノミコトは負の感情を制御し、剣と和歌のワザ（技芸・術）を身につけてイニシエーションを達成し最高の英雄神

と成ったのである。これによって八俣大蛇の破壊力にも比せられる母の怒りと哀しみを鎮魂することができた。怪物退治は忌避され追放された者＝スサノヲが忌避され怖れられた霊物＝八俣大蛇を倒すことによっておのれの凶暴な暴力性を抑え治めることに成功したイニシエーション・ストーリーであった。

ジョン・レノンが歌によっておのれの根源的な「痛み」（スピリチュアルペイン）を解放し昇華したように、スサノヲノミコトもまた「力＝剣による制御（外的世界の鎮め・社会の制御）」と「言葉による制御（内的世界の鎮め・心の制御）」、すなわち詠歌によっておのれの「痛み」と悲しみを開放・浄化し、それを通じて母の悲しみを鎮魂・鎮撫したのである。

ジョン・レノンは母からプレゼントされたバンジョーやエレキギターを持って歌った。そしてスサノヲは剣を持ち、また「天詔琴」あめののりことを持って歌った。こうして、怪物退治と歌の発生を物語るスサノヲ神話は、負の感情と浄化に至るグリーンケアと「嘘のつけない」自己の霊性の根幹の痛み（スピリチュアルペイン）を鎮魂するスピリチュアルの物語となるのである。かくして、歌は『古事記』においては「むすひ」という根源的な生成力とその具体的発現である「修理固成」の表現となり、ケアの日本文化の核心をなすものである。

### 3. 『平家物語』に表現された「スピリチュアルペイン」と危機突破の生存戦略

前節でみたように、『古事記』は『日本書紀』のような勝利者の勝利宣言の書ではない。むしろ、敗者鎮魂の物語といったほうがよい。とりわけ、イザナミノミコトに発出する出雲鎮魂という響きを奏で、哀切を詠う。同様に、『平家物語』も敗者鎮魂の物語である。もちろんそれは、源平の合戦の末の壇ノ浦での平家滅亡という、日本古代史最後を飾り、中世史の開闢を告げる一大戦争に伴う敗者鎮魂の物語である。

先に述べたように、日本古代創世を告げる『古事記』の主調音は、「産巢日（むすひ・産霊）」と「修理固成（おさめ、つくり、かため、なす）」であり、敗残と破壊を組み込みながらもダイナミックな生存の産出力を称揚・讃美する。対して、日本的古代秩序の崩壊と終焉、そして「乱世」「末世」の始まりと道理を示す『平家物語』の主調音は、「無常」と「夢」の儚さと悲哀である。その中での美と栄光と滅びの非情である。

この『平家物語』の悲嘆（グリーフ）を浄化する概念は「諸行無常」であり、それは冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。」という有名な一節に端的に表現されている。それはもちろん、平清盛に代表される平家の繁栄と滅亡を詠う敗者鎮魂の物語であるが、しかしその平家（平清盛一家）の栄光・栄達・繁栄の背後に、源氏（源義朝・頼朝・義経親子や一家）の敗北と悲嘆があったことを忘れてはならない。「諸行無常」とは平氏だけの事態ではなく、敵対した源氏の実態であり道理でもあった。

具体的にその「諸行無常」の歴史事例は、冒頭部で「奢れる人」「奢れる心」の「盛者必衰のことはり（理）」を次のように示す。

遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の禄山、是等は皆旧主先皇の政にも従はず、樂みをきはめ、諫めをも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁る所を知らざっしかば、久しからずして、亡じにし者ども也。近く本朝をうかゞふに、承平の將門・天慶の純友・康和の義親・平治の信頼、奢れる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、まちかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝へうけ給るこそ、心も詞も及ばれぬ。

其先祖を尋ねれば、桓武天皇の皇子、一品式

部卿葛原親王、九代の後胤讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。彼親王の御子高視の王、無官無位にして失せ給ぬ。其御子高望王の時、始て平の姓を給って、上総介になり給ひしより、忽に王氏を出で人臣につらなる。其子鎮守府將軍義茂、後には国香と改む。国香より正盛にいたる迄六代は、諸国の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず。

しかるを忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長寿院を造進して、三十三間の御堂をたて、一千一体の御仏をすへ奉る。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には関国を給ふべき由仰下されける。境節但馬国のあきたりけるを給にけり。上皇御感のあまりに、内の昇殿をゆるさる。忠盛三十六にて初めて昇殿す。

雲の上人は是を猜み、同き年の十二月廿三日、五節豊明の節会の夜、忠盛を闇討にせんとぞ擬せられける。

（新古典文学大系本上、岩波書店より引用）

当時の大帝国である中国の秦や漢や梁や唐の事例がそうであり、本邦においても、平将門、藤原純友、源義親、藤原信頼の先例があり、その先に、平忠盛とその嫡男「六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公」の事例があると示す。

さて、本稿での問題点は、『平家物語』それ自体の分析ではない。そこに「諸行無常」という鎮魂浄化の概念がどのように具体的に物語られているかを示し、そこからグリーフケアやスピリチュアルケアの物語としての思想性と表現の特質を汲み取ることにある。

その観点からみると、問題の核心は、巻頭の「諸行無常」と巻末の「灌頂の巻」に表出されている。「灌頂巻」の主人公は、平清盛（1118-1181）の娘（次女）の平徳子（建礼門院、1155-1214）である。平徳子は17歳で11歳の高倉天皇に内入し、7年後に第一皇子の言仁親王を産む。この言仁親王が安徳天皇（1178-1185）である。

平曲のなかでも秘事・秘曲とされた「灌頂巻」は諸伝あるが、

- ① 女院出家
- ② 大原入
- ③ 大原御幸
- ④ 六道之沙汰
- ⑤ 女院死去

の五節に分かれる。すなわち、平家滅亡の後日談として、建礼門院平徳子＝女院が出家し死去するまでの経緯が物語られる。なかでも、その隠棲した女院建礼門院平徳子のところに、かつての政敵後白河法王が訪ねていって対話する「大原御幸」と「六道之沙汰」が物語のクライマックスであり、哀切の極みを表現する。

壇の浦の戦いにより平家は滅亡するが、この時、建礼門院平徳子の一子安德天皇は、徳子の母で平清盛の妻の二位の尼・平時子(1126-1185)に抱かれ、「君はいまだしるしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御ちからによって、いま万乗のあるじとむまれさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひぬ。まづ東にむかはせ給ひて伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、その後西方浄土の来迎あづからむとおぼしめし、西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべし。この国は粟散辺地とて、心うきさかゝるにてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき処へ具しまいらせらぶらふぞ」。「浪のしたにも都のさぶろうぞ」(巻第十二「先帝身投」)と呼びかけられながら、壇ノ浦の潮流の中、「ちいる(千尋)の底」に身を投じたのであった。

琵琶を抱いた琵琶法師たちは、この幼帝入水のクライマックスを、「悲哉、無常の春の風、忽ちに花の御すがたを散らし、なさけなきかな、分段のあらき浪、玉体を沈めたてまつる。殿をば長生と名づけて、ながきすみかと定め、門をば不老と号して、老せぬとざしとかきたれども、いまだ十歳のうちにして、そこのみくづとならせ給ふ。十善帝位の御果報、申すもなかなかおろかなり。雲上の竜くだって海底の魚となり給ふ。」と万感の情念を込めて詠い上げ、弔い上げた。

この時、二位の尼や安德天皇同様に海中に身を投じた徳子は、源氏の武者渡辺源五馬允に引

き上げられ、その後、平安京東山の麓の吉田の地で出家した。だが、元暦2年(1185)7月9日に起きた巨大地震で壊れたため、大原の寂光院に庵を設けて移り住んだ。

この大地震は、『平家物語』巻十二「大地震」において詳しく物語られている。「平家みなほろびはてて、西国もしづまりぬ。」で始まるこの章には、鴨長明の『方丈記』ともほぼ共通する大震災の詳細な記述がみられる<sup>6)</sup>。『平家物語』には、平清盛の父平忠盛の建立した得長寿院も三十三間堂もみな倒壊したと次のように物語られる。「得長寿院も、三十三間の御堂を、十七間までふりたうす。皇居をはじめて、人々の家々、すべて在々所々の神社・仏閣、あやしの民屋、さながらやぶれくづる。くづる・音はいかづちのごとく、あがる塵は煙のごとし。天暗うして、日の光も見えず。老少ともに魂を消し、朝衆悉く心を尽す。又遠国・近国もかくのごとし。大地さけて水わき出で、盤石われて谷へまろぶ。山くづれて河をうづみ、海たゞひて浜をひたす。汀こぐ船はなみにゆられ、陸ゆく駒は足のたてどを失へり。洪水みなぎり来れば、岳にのぼっても、などかたすからざらむ。猛火もえ来らば、河をへだてても、しばしもさんぬべし。たゞかなしかりけるは大地震也。鳥にあらざれば、空をもちけりがたく、竜にあらざれば、雲にも又のぼりがたし。」

そして重要なことは、「今度の事は、是より後もたぐひあるべしともおぼえず。十善帝王、都を出でさせ給て、御身を海底に沈め、大臣・公卿大路をわたして、その頸を獄門にかけらる。昔より今に至るまで、怨霊はおそろしき事なれば、余もいかゞあらんずらんとて、心ある人の嘆きかなしまぬはなかりけり。」と、「怨霊」の仕業と恐れられたことである<sup>7)</sup>。

この大地震の直前には先帝・安德天皇と戦死者の霊を弔う堂舎を壇ノ浦のある長門に建立しようという建議がなされていた。その直後にこの大地震があり、余震も頻発したので、同年8月19日元号を「文治」と改元した。慈円(1155-1225)の兄の九条兼実(1149-1207)は



一連の現象を祟りと捉え、源平の合戦の死者の恨みに因るものとみた。その九条兼実の求めに応じて建久9年（1198）に著されたのが法然の主著ともなった『選択本願念仏集』である<sup>8)</sup>。

こうして、平家滅亡から一年が経った文治2年（1186）4月、徳子の庵に後白河法皇が訪れてきた。徳子はうらぶれた姿を見られることを恥じ、会うことを嫌がったが、藤原信西の娘の阿波内侍の促しで、後白河法皇を庵に迎え入れる。そして、後白河法皇と対話する。

この法皇と女院との対話こそ、敗者鎮魂の物語としての『平家物語』の窮境供養であろう。激動の乱世を生き抜いてきた後白河法皇は言う。「此国は、粟散辺土なりといへども、忝く十善の余薫に答て、万乗のあるじとなり、随分一つとして、こゝろにかなはずといふ事なし。就中仏法流布の世にむまれて、仏道修行の心ざしあれば、後生善所疑あるべからず。人間のあだ名なら日は、今更おどろくべきにはあらねども、御ありさま見奉るに、あまりにせんかたなふこそ候へ」と、人の世の儚さと不条理ややり切れなさを女院に表白する。

それに対して、女院建礼門院平徳子は実に流麗なる長広舌の生涯の語りのかつては敵ともなった後白河法皇に聞かせるのである。圧巻の語りのくぐりである。

我平相国のむすめとして、天子の<sup>こくも</sup>国母となりしかば、一天四海、みなたなごゝろのまゝなり。拝礼の春の始めより、色々の衣がへ、仏名の年の暮れ、摂祿以下の大臣・公卿にもてなされしありさま、六欲・四禪の雲の上にて、八方の諸天に圍繞せられさぶらふさむ様に、百官悉あふがぬものやさぶらひし。（中略）かくてよる方なかししは、五衰必滅の悲みとこそおほえさぶらひしか。人間の事は、愛別離苦・怨憎会苦共に我身に知られてさぶらふ。四苦・八苦、一つして残る所さぶらはず。（以下略）

と、とめどないほどに一気に語り継ぐ。そして、「国母」として女人の頂点に立ち、栄光の

極みに達していた女院が最愛のわが子安徳帝を母の二位の尼平時子と共に喪うくぐりに続いていく。

二位の尼、先帝をいだき奉て、ふなばたへ出し時、あきれたる御様にて、「尼ぜ、われをばいづちへ具してゆかんとするぞ」と、仰せさぶらひしかば、いとけなき君にむかひ奉り、涙をおさへて申さぶらひしは、「君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御力によって、今万乗のあるじと生まれさせ給へども、悪縁にひかれて、御運既に尽き給ひぬ。まづ東にむかはせ給ひて、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、西にむかはせ給ひて、御念仏侍らふべし。此国は粟散辺地とて、心うき界にてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき所へ具しまいらせら侍らふぞ」と、泣々申さぶらひしかば、山鳩色の御衣に、びんづらいはせ給ひて、御涙におぼれ、ちいさううつくしい御手をあはせ、まづ東をふしおがみ、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位尼やがていだき奉て、海に沈し御面影、目もくれ心も消はてて、忘れんとすれ共、忘れられず、忍ばんとすれ共しのぼれず。残りともまる人々のおめきさげびし声、叫喚・大叫喚のほのほの底の罪人も、これには過じとこそおほえさぶらひしか。

女院建礼門院平徳子は語り尽す。安徳天皇は前世の「十善戒行」の功德により日本国の「あるじ」である天皇位に就いたが、しかし、「悪縁」に引っ張られて、壇ノ浦の合戦の末に、数えの8歳という若さでその「運」も尽き果ててしまった。その幼き身の最期に当たり、東に向いて皇祖伊勢の天照大神を拝し、西に向いては極楽往生を願って阿弥陀如来に念仏し、祖母の二位の尼の平時子の胸に抱かれて海中に没していったが、その時のありさまが実に鮮やかにリアルに目に焼き付き、忘れることができない。その場の人々の阿鼻叫喚の凄まじさは叫喚地獄

にもまさるほどで、この身に刻まれている。

こうして徳子は、この最期の出来事が深い心のトラウマとなって忘れることができず、悲しみにも耐えられず、日々泣き崩れながらひたすらに息子や父母や兄弟、一族郎党の菩提を弔う毎日が続いている。女院は後白河法皇に、母の二位の尼・平時子から平氏の菩提を弔うよう頼まれていたことを明かし、そこで生きながらにして「六道」をみた、「六道にたがはじ」と「六道之沙汰」を物語る。

その「六道語り」とは、一般に、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天を指すが、ここでは天上道、人間道、餓鬼道、修羅道、地獄道、畜生道の順で物語られる。簡単に要点を列記すれば次のようになる。

- ① 天上道：平清盛の娘として生まれ、「天子の国母」となり何不自由のない思いのままの贅沢三昧の生活は天上界のようであったが、寿永2年、木曾義仲に追われて都を出ざるを得なくなった。そのさまはあたかも「天人五衰」の悲しみであった。
- ② 人間道：いやというほどに、愛別離苦と怨恨会苦、四苦八苦を経験した。
- ③ 餓鬼道：海上生活では食事にも事欠く有様だった。
- ④ 修羅道：明けても暮れても毎日毎時が戦い連続で休む間もなく、合戦による死を目撃し続けた。
- ⑤ 地獄道：二位の尼が入水する前、「いかにもしてながらへて、主上の後世をとぶらひまいらせ、我らが後世をもたすけ給へ」と言い残し、安徳天皇を抱いて海中に没した。そのさま忘れることができず、悲しみにも耐えられない。周りの人々の叫び声はまるで叫喚地獄のようだった。
- ⑥ 畜生道：都に戻る途中、夢を見た。安徳天皇と一門が昔より立派な御殿に威儀を正して居並んでいる夢だった。「ここはどこか」と訊くと、二位の尼が「龍宮城」と答えた。「ここには苦しみはないのか」と尋ねると、龍畜経の中に書いてあるので「よくよく後

世をとぶらひ給へ」と言われ、そこで目が覚めた。

以上が「六道之沙汰」であった。

それを聞いて、後白河法皇も「異国の玄奘三蔵は、悟の前に六道を見、吾朝の日蔵上人は、蔵王権現の御力にて、六道を見たりとこそうけ給はれ。是程まのあたりに御覧ぜられける御事、誠にありがたふこそ候へ」と堪え切れずに涙を流した。建礼門院平徳子もお供の者もみなとどめなく涙を流した。

この段の物語こそ、『平家物語』最終巻である「灌頂巻」の「窮境の語り」であり、「灌頂」に当たる「秘儀の語り」であった。なぜなら、この「語り尽し」がなければ、菩提の供養は成就しないからである。女人として「国母」という最高位に就いた徳子が平家一族の「全痛み」を背負ってシャーマンともいえる語りの力で、その「痛み」と「悲しみ」、悲哀と哀切を物語るのである。そして、それがかつての庇護者にして政敵であった後白河法皇やお供の者たちがひたすら「傾聴」し、共に涙を流す<sup>9)</sup>。

これ以上のグリーフケア、スピリチュアルケアがあるだろうか？ ここにおいて、「痛み」は痛みとして受け入れられ、「諸行無常」の出来事として諦念とともに受容される。『平家物語』が、歴史的事実でありつつも「民族の叙事詩」であり、かつまたグリーフケアやスピリチュアルケアの物語というのもご理解いただこう。

そしてそれは、『古事記』のように、宮廷の一部の人々や氏族の中で密かに物語られ、伝承されていたものとは違って、数多の琵琶法師たちによって、各地各所で琵琶語りされながら謡われていったことを考えると、これほど一般に膾炙し共有されたグリーフケアとスピリチュアルケアの物語はこれまでも、この後にもなかったといえるのである。それほど『平家物語』がもつ意味と意義は大きいものがある。

そのことを、複式無限能を完成させた世阿弥は大変よく理解していた<sup>10)</sup>。現在、能の原話として、『平家物語』や『源平盛衰記』から「敦

盛」「生田敦盛」「叡」「大原御幸」「景清」「兼平」「祇王」「清経」「小督」「実盛」「俊寛」「正尊」「摂待」「千手」「忠度」「経政」「巴」「鶴」「藤戸」「船弁慶」「通盛」「盛久」「八島」「熊野」「頼政」など25曲ほどが演能されているが、死者や亡霊や怨霊の鎮魂供養の儀式的演劇としての能において、もっとも多くの題材が『平家物語』から採取されていることの意味はよく理解できる。世阿弥は、複式夢幻能としての修羅能を完成させる際、もっともその「痛み」を表出し、鎮撫できる出来事と語りとして『平家物語』を意識して選んだのである。そして能の中では、『平家物語』最終巻「灌頂巻」は「大原御幸」として表現され、今も人気曲目として繰り返し上演され続けている<sup>11)</sup>。

『平家物語』最終巻「灌頂巻」では、後白河法皇の去るのを見送った後、庵に入った徳子は仏前に進み出て、「天子聖霊、成等正覚、一門亡魂、頓証菩提」を祈る。昔は東に向かって伊勢神宮と正八幡宮を拝し、「天子宝算千秋万歳」を祈ったが、今は西に向かって「過去聖霊、必ず一浄土へ」と祈るほかなく、その悲しさに身を焦がす。徳子は、

このごろはいつならひてかわがこゝろ  
　　大みや人のこひしかるらん  
(いつのまにこんな癖がついてしまったのか、  
最近は大宮人が恋しくてたまらない)

いにしへも夢になりにし事なれば  
　　柴のあみ戸もひさしからじな  
(昔の栄光も儚い夢となってしまった。それと  
同じように、この柴庵での暮らしも長いことで  
はなく、間もなくあの世に行けるだろう)

と詠う。この時、後白河法皇に供奉した徳大寺実定は建礼門院平徳子の栄光と無常を次のように詠う。

いにしへは月にたとへし君なれど  
　　その光なき深山<sup>みやまべ</sup>辺の里

(かつては月にも喻えられるほどのお方であったが、今はその栄華は微塵もなく、大原の深い山里でこれほどまでに侘しく暮らしているのか)

と、徳子は悲嘆に暮れ、涙に咽んだが、その時、ホトトギスの鳴き声が聞こえてきた。そこで徳子は、

いざさらばなみだくらべん<sup>ほととぎす</sup>時鳥  
　　われもうき世にねをのみぞ<sup>なく</sup>鳴  
(ホトトギスよ、わたしと泣き比べをしよう。  
わたしもこの憂き世に耐えかねて音を上げ、泣  
い暮らすばかりだ)

と詠ったのであった。

この最後の最後で、四首の短歌が詠じられることの重要性は強調するまでもないだろう。「歌物語」であった『古事記』と同様に、『平家物語』もその全体が「歌物語(謡物語)」であった。その物語の最後に、このような女院建礼門院平徳子の歌(三首)が詠われ、「灌頂巻」もその役目を果たし終えることになる。そして物語は、最終節の「女院死去」の段となり、終わる。

女院建礼門院平徳子は、実際にはその後30年余生を永らえたという。覚一本『平家物語』では、建久2年(1191)2月に「女院死去」が語られるが、一般には、健保元年(1214)に死去したとされている。

『平家物語』「灌頂巻」の最後は、「御念仏のこゑ、やうやうよはらせましければ、西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ」と物語られる。「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならず引<sup>いんじょう</sup>摂し給へ」と念仏を唱える建礼門院平徳子の声が次第に弱まるににつれ、西の方から紫雲が棚引いてきて、異香が庵室に満ち満ち、空には音楽が鳴り響いた、すなわち、極楽往生したと物語られ、鎮魂供養も「灌頂」も成就したことになるのである。

こうして、平家の滅亡を目の当たりにし、そ

の菩提を弔う羽目になった平徳子ほど、悲哀を生きなければならない者はいなかった。平清盛よりもいっそうこの平徳子の生涯こそ、「諸行無常」の極みであり、哀切である。だが、その悲痛の極みの者であってもこのように極楽往生したと『平家物語』は語ることによって、敗者鎮魂の物語を成就したのである。そしてその肝心なところに歌が挿入され、哀切に詠われたのであった。

さて、この『平家物語』で特筆しなければならない段が、スサノヲの八俣の大蛇退治と草薙剣の発見とその喪失を語る巻第十一の「剣」の段である。ここで、『古事記』よりもさらに詳しく具体的に八俣の大蛇を退治し、草薙剣を見いだすくだりが語られることも、物語の伝承性のみならず、『古事記』と『平家物語』の物語的同質性を伺わせるものである。

この段の冒頭では、日本には「神代」より伝わる三種の「霊剣」があると語られる。

① 十つかの剣（十拳剣）

～大和国の石上神宮に収められている。

② あまのはやきりの剣（天羽々斬剣）

～尾張国の熱田神宮に収められている。

③ 草なぎの剣

～内裏に収められている。

その三種の霊剣のなかでも、草薙剣はスサノヲノミコトが出雲の国で「端上のむすめ」の「ぬなだ姫」を助けたときに、「件の大蛇」の尾から取り出したものであることが実に詳しく報じられる。そしてそのまえに、「八雲たつ出雲八えがきつまごめに やえがきつくるそのやえがきを」のスサノヲの詠歌が示され、「これを三十一字のはじめとす。国を出雲となづくる事も、すなはちこのゆえとぞ奉はる。」とされる。

そして、『古事記』や『日本書紀』にも記されていない草薙剣の奉持の過程が詳しく述べられる。それをまとめると、

① スサノヲノミコトが八俣の大蛇の尾から発見。「あめの村雲の剣」と名づけられた。

② 天照大神が「天孫」ニニギノミコトに伝えて「豊葦原中津国のあるじ」として、八咫

鏡に添えて天下りさせた。

③ 初代神武天皇から第九代開化天皇までは、同じ御殿に祀られていた。

④ 第十代崇神天皇の世に天照大神を大和の国の笠縫の里に移した際、この剣も天照大神の「社壇」に収め、草薙剣を作り替えて「御まもり」としたが、その「御霊威」は元の剣に劣るものではなかった。

⑤ 崇神天皇より第十二代景行天皇までの三代は「天照大神の社壇」の収められていたが、ヤマトタケルノミコトの東征の際、その「霊剣」をミコトに授け、命は駿河の国で賊に襲われた時、その「霊剣」を抜いて草を薙ぎ払い、危難を切り抜けることができた。以来、この剣を「草なぎ剣」を呼ぶようになった。東国を制したが、ミコトは大和の国に戻る途中で亡くなったので、剣を「熱田の社」に収めた。

⑥ 天智天皇七年、「新羅の沙門道慶」がこの剣を盗んで新羅に持ち帰ろうとしたが、海上に波風が立ち、難を逃れることができた。これは「霊剣のたゝり」とされた。

⑦ 天武天皇朱鳥元年、この剣を「内裏」に置くようになり、今に至る。

その大切に伝承されてきた三種の神器の一つである草薙剣が「二位殿腰にさして」安徳天皇とともに海中に没したのである。そこで腕の立つ海人・海女たちに潜らせて海底を探らせたが見つからない。「霊仏・霊者にたつき僧をこめ、種々の神宝をさゝげていのり」上げたが、それでも見つからず、終に失ってしまった。そこで、ある陰陽寮の「博士」は、「むかし出雲国ひの河上にて、素戔嗚の尊にきり殺されたてまつりし大蛇、霊剣をおしむ心ふかくして、八のかしら、八の尾を表事として、人王八十代の後、八歳の帝となつて、霊剣をとりかへして、海底に沈み給ふにこそ」と言ったと語られる。つまり、八俣の大蛇が安徳天皇に身を変えて草薙剣を取り返したと解釈したのである。その時代に噂された一般的な解釈は、草薙剣が失われたので武士の世になっていったというもの



であった。

いずれにしても、このような語りを通して、「盛者必衰」と「諸行無常」のさまが、実に具体的に、ドラマチックに、琵琶語りの哀調の節回しとともに物語られ、謡われたのである。そしてそれが舞を伴いつつ、世阿弥により能（申楽）の中に取り込まれていった。その能もまた、日本伝統のグリーフケア・スピリチュアルと呼べる形式と内容をもっている<sup>12)</sup>。

## むすびに代えて

本論に入る前にすでに紙幅が過ぎた。最初、本稿は、

1. 『古事記』の生存戦略～祭り・神楽と歌・歌謡の発生
2. 『古今和歌集』の和歌ルネッサンスと日本の芸能の本幹
3. 『平家物語』の琵琶語りとスピリチュアルペインの極み
4. 石牟礼道子『苦界浄土』とペインの看取り
5. 遠藤周作『深い河』の天津神父の流れ行く先
6. 東日本大震災とスピリチュアルケアと臨床宗教師
7. 雄勝法印神楽（宮城県石巻市雄勝町）の「楽力」

の順に考察を進めていく予定であった。だが、冒頭でジョン・レノンの歌と「痛み（pain）」について考え始めた結果、このような歌と喪失と物語と鎮魂とスピリチュアルケアの問題を事例的に検証し考察していただく紙幅が尽きた。編集委員会の求めに充分に応えられず申し訳なく思うが、この続きは別の機会に考察したい。なお、すでに『苦海浄土』や『深い河』や東日本大震災や雄勝法印神楽についてはいくつかの論考をまとめているので参照していただけると幸いである<sup>13)</sup>。

## 注

- 1) また「スピリチュアル」五則として次のように定

立している。1. スピリチュアリティ（霊性）の三要素は、①全体性（まるごと）、②根源性（ねっこ）、③深化・変容（ふかまり）、である。2. スピリチュアリティ（霊性）とは「生の羅針盤（いのちのコンパス）」であり「道（Way）」である。3. スピリチュアリティ（霊性）とは「独り」でありつつ「同行二人」である。4. スピリチュアルケアとは、「あいだ」にあるはたらきを感知するスピリチュアリティ（霊性）の臨機応変的発動である。5. スピリチュアルケアは、「生態智」（「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの技法と知恵」）によって磨かれる。この五側と関連して、「スピリチュアリティ」とは「嘘をつけない自分や他者と向き合うプロセス」であるとみ、そこにおいて、「あいだ」にあるはたらきを感知しつつ、まるごとの素の自分を見つめ、いのちの帰趨に向い合うことが「スピリチュアルケア」とあるとみる。その「スピリチュアルケア」はまた、「こころの道連れ」「いのちの気づき合い」ということができる。こうした「スピリチュアルケア」が本来的に包摂する他者性は、仏教的に言えば、「上求菩提下化衆生」の自利・利他両備の菩薩道性であるともいえる。したがって、「スピリチュアルケア」とは、自己の死生観の錬成を含む自己探究と対人援助の両者が分かち難く結びついていると考えるものである。鎌田東二企画・編『講座スピリチュアル学 第1巻 スピリチュアルケア』、BNP、2014年、および『第6巻 スピリチュアリティと芸術』『第7巻 スピリチュアリティと宗教』を参照されたい。

- 2) ジョン・レノンについては、鎌田東二「ジョン・レノン」（『著名人が語る〈知の最前線〉 生き方と心に学ぶ（海外編）第六巻』、リブリオ出版、2007年、195-258頁）で詳論したことがある。鎌田東二『翁童論——子どもと老人の精神誌』、新曜社、1988年。『ジョン・レノン・ミュージアム・プログラム』、大成建設株式会社、2000年。「母の死」には「So much pain」とある。
- 3) 鎌田東二『古事記ワンダーランド』、角川選書、2012年に次のように記述した。「実際は、『辱』から鎮魂やグリーフ・ケアやスピリチュアル・ケアの必要が生まれることになった。その必要が『古事記』を生み出した。その意味で、この『辱』というイザナミの『負の感情』の生起は、日本文化にとって決定的に重要な意味をもって

いる。イザナミの『辱』は『負の感情』として消えることなく、累積したままだから、それが日本の『辱の文化』にまでつながっている。」(50頁)。このイザナミノミコトの「負の感情」がサノヲノミコトに受け継がれていく。なお、北山修・橋本雅之共著『日本人の〈原罪〉』講談社現代新書、2009年にも、「みるな」のタブーとその侵犯にかかわるイザナミノミコトの感情の蟠りについて議論されている。

- 4) 細かい論証をする紙幅の余裕はないので、結論的解釈のみをいえば、最後に化生した神サノヲノミコトには、国生み神話で最初に産まれて捨てられたヒルコとイザナミノミコトの神生みで最後に産まれて殺されたカグツチの負の感情と痛みも継承されている。前掲『古事記ワンダーランド』および鎌田東二『世直しの思想』。
- 5) 黄泉国に「神避」したイザナミノミコトの死を目の当たりにしたイザナギノミコトは、「『愛しき我が汝妹の命を、子の一つ木に易へつるかも。』と謂りたまひて、すなはち御枕方へ葡萄ひて啼きし時、御涙に成れる神は、香山の畝尾の木の本にまして、泣沢女神と名づく。故、その神避りし伊邪那美神は出雲国と伯伎国との堺の比婆の山に葬りき。ここに伊邪那岐命、御佩せる十拳剣を抜きて、その子迦具土神の頸を斬りたまひき」と、慟哭して産まれたばかりの子神カグツチの首を斬った。その首から飛び散った血より、石拆神、根拆神、石筒之男神など八神が成り出でたと『古事記』(岩波文庫本)にある。
- 6) 『方丈記』には、元暦の大地震は、「又同じころかとよ、おびた、しく大地震振ること侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土さけて水わきいで、巖われて谷にまろびいる。渚漕ぐ船は浪にたゞよひ、道ゆく馬は足の立ちどをまどはす。都のほとりには、在々所々、堂舎廟塔、ひとつとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ち上りて、盛りなる煙のごとし。地の動き、家の破るゝ音、雷にことならず。家の中にをれば、忽にひしげなんとす。走り出づれば、地われさく。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らむ。恐れのかなに恐るべかりけるは、只地震(なみ)なりけりとこそ覚え侍りしか。かくおびた、しく振る事は、しばしにてやみにしかども、そのなごりしばしは絶えず。世の常驚くほどの地震、二三十度振らぬ日はなし。」と記述されている。
- 7) 慈円著『愚管抄』には、この時の大地震の原因が、

「竜王動トゾ申シ、平相国竜ニ成テフリタルト世ニハ申ス」と、平清盛が「国竜」になって揺すったとも記されている。

- 8) 慈円の『愚管抄』巻七に、「昔ヨリ怨霊ト云物ノ世ヲウシナイ人ヲホロボス道理ノツ侍」と記し、井上内親王を始め、怨霊がさまざまな形で災いをもたらす事例を挙げているが、保元の乱(1156)以後は「武者の世」ないし「末世」になったとみ、平治の乱で源義朝や家臣の鎌田正清のことについてかなり詳しく記述している。直接本論とは関係はないが、『平家物語』「大地震」の次の巻の「紺掻の沙汰」の冒頭には、「同じ八月廿二日、鎌倉の源二位頼朝卿の父、故佐馬頭義朝のうらはしきこうべとて、高尾の文覚上人頸にかけ、鎌田兵衛が頸をば、弟子が頸にかけさせて、鎌倉へぞ下されける。」とあり、平治の乱で討ち死にした源頼朝の父源義朝と一の家臣鎌田兵衛正清(政清)の首が文覚上人とその弟子によって鎌倉にもたらされたとされている。また、『平家物語』巻十「維盛出家」の段にも、「重景が父与三左衛門景康は、平治の逆乱の時、故殿の御共に候けるが、二条堀河の辺にて、鎌田兵衛にくんで、悪源太に討たれ候ぬ。」と物語られる。この「鎌田兵衛」が私の祖先になる。
- 9) 『平家物語』諸本では、この「痛み」の表出は、徳子の恨み語りなどを巡ってもそれぞれにかなり大きな違いと特色がある。おそらくは、琵琶法師の経歴や所属によって、女院建礼門院平徳子に託して恨みの数々を語り上げる内的必然と濃度・強度は大きく異なっていたと推測できる。もし平家一門やその系流で琵琶法師になったとすれば、平徳子に寄せ託し鎮魂供養を願う思いは人一倍大きく強いものがあつたであろう。
- 10) 世阿弥について、詳しくは、鎌田東二『世阿弥——身心変容技法の思想』青土社、2016年を参照されたい。
- 11) 能「大原御幸」は、『平家物語』「灌頂巻」をほぼ踏襲している。あらすじは次のようなものである。平家滅亡後、寂光院で一門の死者の菩提を弔い、仏に仕える日々を送る女院建礼門院平徳子の元に、徳子の夫であつた故高倉天皇の父後白河法皇が現われる。その時、女院は仏前に供える櫛や山菜などを取りに山に入っていた。女院の帰りを待っていた法皇と女院は久方ぶりに対面する。法皇が女院が六道をみたことの事由を問かけると、堰を切ったように、女院がその数奇な運命の果てに平家一門の最期とわが子安德天皇入水を看取り六道輪廻を目撃した経

- 験を涙ながらに物語り、無常の風を感じつつ別れる。
- 12) この点については、鎌田東二「スピリチュアルケアと死生学」、『スピリチュアル』第5号所収、上智大学グリーンケア研究所、2017年3月刊を参照されたい。
- 13) 鎌田東二『現代神道論——霊性と生態智の探求』、春秋社、2011年。  
——『世直しの思想』、春秋社、2016年。  
——『世阿弥——身心変容技法の思想』、青土社、2016年。  
——『日本人は死んだらどこへ行くのか』、PHP新書、2017年。  
——『言霊の思想』、青土社、2017年。  
——「こころの練り方探究第六 遠藤周作と石牟禮道子の『汎神論』」、『モノ学・感覚価値研究第10号、京都大学こころの未来研究センター、2016年3月。など。

## Spiritual Care, Song, and Literature

Tôji Kamata<sup>1</sup>

### Abstract

“The body does not lie but the heart does. The soul, however, cannot tell a lie.” Spiritual care is “an effort and process, starting with the honest encounter of oneself and another, that involves creating and developing a dialogical relationship.” The aim of this paper is to explore how this theme appears in song and literature. An analysis will be presented of the songs in the solo album *John Lennon* (1970), texts from *Kojiki*, and three tales from *Tale of the Heike*. I will attempt to clarify how the themes of pain and love in *John Lennon*, the notion of *musuhi* (the power of becoming or creation) in *Kojiki*, and the ideas of impermanence and dream in *Tale of the Heike* relate to what might be termed a philosophy of survival. I will also offer some reflections on how the issues examined here relate to spiritual care.

**Key Words:** John Lennon, *Kojiki*, philosophy of survival, *Tale of the Heike*, spiritual care

<sup>1</sup> Institute of Grief Care, Sophia University